

# 山が教えてくれたもの

旧大町高校出身の三戸呂拓也先生が自らの登山経験から学んだことを講演してくださいました。  
講演でお話いただいた内容を紹介します。

## クライマー 三戸呂 拓也 先生

旧大町高校 第55回卒業生。高校時代から山岳部に所属し、明治大学時代に2年間主将を務める。高校時代にはインターハイに出場。現在は山岳ユーティリティーとして著名人と共に登頂するなど幅広く活動している。

三戸呂先生は、大学山岳部で主将を務めた経験から、チームワークとは、メンバー1人1人が自分の役割を全うして作っていくもの。リーダーはただ偉い人になるのではなく、情熱と信念を持ち、メンバーを同じベクトルにすることが役割であることを学びました。



大学卒業後の2008年、7名の日本クーラカンリ登山隊のメンバーとして登頂を目指しましたが、3人の仲間が雪崩に巻き込まれ、遺体を抱えて下山するという事故が発生。彼らは亡くなってしまったのに自分たちは生きている。頑張ってきた結果がこれかと思い、大好きな登山が嫌いになり、帰国後、家に帰って道具を仕舞い込みました。



事故から一か月後の登山報告会。三戸呂さんは遺族の方から亡くなった仲間の分まで生きろと言われ、登山はどこかで支えてくれている人がいるからこそできる活動なのだ気付きました。

2009年アイスクライミング中に5mの高さから落下し、左足首を骨折。3週間の入院で努力の成果である足の筋肉が無くなるという辛い経験をしましたが、入院中に自分と向き合い、「痛い・辛い・苦しい」という感情は生きているからこそ分かることなんだ。次の日からまた始められるかもしれないと前向きに考える様になりました。



登山を通し様々な経験をされたからこそ、出てくる言葉の1つ1つが、私達にしっかりと伝わってくる講演でした。

最後に、大町は、朝起きて、雲の間から光が差して、夜星が光っている。ここにいるからそれを感じられる。大人になって大町を離れても、誇りに思えるようになってほしい。そう三戸呂先生は私達におっしゃいました。

当たり前のように日常に価値があるということですね。  
三戸呂拓也先生ありがとうございました。

文責：生徒会執行補佐